

熊本地震に支援の輪

九州広域で被害が出ている熊本地震。宗派内では熊本教区を中心に被害状況がさらに明らかになり、被災地では今もなお続く余震や長期化する避難生活、先行きの見えない暮らしに不安が広がる中、お寺を中心に支援の輪が広がっている。やり場のない悲しみに耳を傾けるボランティア。地域の人や仲間と支え励まし合う住職・寺族。笑顔と笑顔が寄り合い、ぬくもりを分け合っている。

(2、3面に熊本地震関連記事)

宗門は「熊本地震支援センター」(福岡県大牟田市・大牟田別院内)のボランティアとして、4月22日から本山や別院の職員を派遣し、被災寺院は、震度7の激震で被害



「言葉交わすだけでありがたい」

ごはんと一緒に振る舞った。炊き出し開始の5時半には住民の列ができ、職員らが「お好みの具は」などと声を掛けながら湯気の立ちのぼる椀を手渡すと、「地震以来、玉子は初めて」「温かいご飯を毎日ありがとう」と笑みが広がった。

列が途切れると、女性職員2人がおかわりを持って施設の中へ。「食事は足りましたか」と聞きながら、腰の高さほどの段ボールで仕切った避難所のスペースを巡り、被災者の傍らに腰を下ろして話を聞き始めた(写真)。

一人暮らしの自宅から着の身着のまま避難してきた田上ユキノさん(93、益城町・専寿寺門徒)は、20年前に本願寺を訪れた思い出を語り始めた。「書院の大広間や境内のイチョウ…、今思えば夢のようでした」と語り、話は次第に墓、家

族の法事、先々の暮らしの不安へと進んだ。わずかに10分ほどの「傾聴」だったが、田上さんは「お寺さんでないと話せないこともある。ストレスがたまると一方なので言葉を

交わせるだけでありがたい」と礼を述べた。職員による傾聴は、避難者の心のケアにまで手の回らない同施設のスタッフやボランティアにも喜ばれ、4日間行われた。